Ogata-kai

Overseas technical support, its vision and direction in the future

小形会の海外技術支援、そのビジョンと方向

土沼隆雄

はじめに

海外における日本庭園については、日本的文化要素の一面として広く海外各国でつくられてきた。海外で日本庭園をつくり、ここまで維持・継承することは並大抵のことではなかったであろう。この先人たちの苦労ともいえる努力のおかげで、ようやくここに来て日本庭園が海外でも注目されるようになってきた。

海外では、日本庭園には「何かある」と考えている人が多い。今日、複雑なストレスを抱えている現代社会において、それは深く精神面に効いてくる何かで、例えば人の心を癒す力ではないかと。

しかし今、日本サイドが行う海外技術支援では、このことに一切触れられていない。これでは世界の中の日本庭園はやがて社会から見放され、形骸化してしまうだろう。

さて、このたび日本修景協会機関誌「造園修景」138号の執筆に際し「小形会の海外技術支援、そのビジョンと方向」の記述のなかで、あらためて日本庭園そのものの価値と存在意義を原点に戻って触れてみたいと思う。

〈項目〉

海外日本庭園の現状
今までの海外日本庭園の技術支援活動
小形会と小形研三
小形会の趣旨と目的
小形会の海外技術支援活動
小形会とハコネ庭園
ハコネ庭園（Hakone Gardens）
小形会の海外技術支援と基本的な考え方
庭園の本質的価値を考える
支援の進め方と承認プロセス
技術支援の実践
海外支援の方向と課題

海外日本庭園の現状

海外の日本庭園は、戦後、あらためて両国の友好関係の絆や文化交流の場として活発に築造されるようになり、その多くが市民に公開されている。しかし、近年、継続維持の難しさに直面している。その問題として①美的な空間としてのみで日本庭園をとらえる価値意識の低下とその評価の曖昧さ、②管理運営を行う組織体制の不備、③「変化する」という庭園の避け難い特質を起点にした的確で継続的な維持管理技術とその養成システムの未開発、④社会との結びつきや文化交流の場の意義の消失や財源確保の難しさ、などが挙げられる。これらはいずれも、もはや一日本庭園のみの問題ではなく、それぞれ場所や規模を超えて国内外の庭園に共通する緊急かつ重要な問題との認識が深まっている。日本庭園が持つ共通の問題・課題を解決に導くためには、それぞれに関わる専門分野の役割強化と庭園・個人・団体相互の広域的情報交換ネットワークが不可欠である。

今までの海外日本庭園の技術支援活動

日本庭園の海外技術支援では、庭園の築造から維持管理、技術トレーニングまでをトータルで支援した活動としてポートランド日本庭園の支援プログラムがある。ポートランド日本庭園は、庭園着工から完成までの間、庭園築造と維持管理・運営管理において一貫して日本人造園家が関わりを持ってきた。この制度は「ディレクターシステム」と呼ばれ、1964年以来、ほぼ3年ごとに若い造園家が入れ換わりながらも継続して在駐し、1991年まで現地の人々と協働して日本庭園をつくり上げ、管理技術も継承させてきた。

戦後15年を経た1960年頃、米国オレゴン州ポートランド市に日米両国の友好と親善の場として日系人会や地元市民らの間で日本庭園築造の機運が高まり、1963年には正式にオレゴン日本庭園協会が設立された。設計者には当時、北米中心に活躍していたコーネル大学造園科出身の日本人造園家・戸野琢磨（1891-1985）が選ばれた。

当時、財源困窮の時代であったにも関わらずW・ドゥウイース会長らによって日本人若手造園家が常駐して庭園工事、維持管理などを行うディレクターシステムが確立された。

1991年まで延べ8名によって実施されたこの制度の最も特徴的側面は、個々のディレクターの単独活動が「形」に終わらず、現地人技術者と協働しながら30年余り継続して行った創作活動によって全体として統一感のある様式美をもたらし、一定の評価を受ける「作品」として転化されたこと。その過程で庭園を維持し継承する技術や修復の仕方、日本庭園が持つ独特の文化性、精神性の理解にまで貢献したことが大きかった。

表-1：ディレクターシステムが果たした役割

[1] 日本庭園の理解に貢献	日本人造園家が培った技術で築庭され、しかも長期間の継続関与が質に転換されて庭園の陳腐化、無国籍化を回避し、本格的な日本庭園を実現できた。又、その技術を現地スタッフに指導して庭園技術の伝達を図ると共に日本庭園の持つ美意識、価値観、思想性などへの理解促進と啓蒙にも大きく貢献。
[2] 庭園の物理的変化と市民要求に対応	35年の時間軸の流れの中で、庭園の物理的構成の質的変化や、更には市民の日本庭園に対する幅広い要求に歴代ディレクターが積極的に対応して築庭計画に反映させた。また伝統的手法による古典的庭園（剪定矮小化した庭木、花が無いなど）のみが日本の庭園であるかの固定観念からの脱却を図り、現代造園が培った空間構成やディテール手法を随所に展開した。その意味では市民に分かりやすい身近な庭園となっており、日本庭園本来の物理的機能、景観美に加え、自然空間としての保全機能、レクリエーション機能、更には市民参加の舞台として、庭園の現代的意義への発展と新しいスタイルの日本庭園を定着させた。
[3] 維持管理技術の伝承	ディレクターの役割の一つに維持管理の技術指導があった。以前からディレクターによって継続的に行われてきた維持管理は、1977年、5代目水野雅之の「日本庭園に維持管理は最も重安な技術」の指摘に協会は現地技術者数名を雇用し、維持管理技術者の養成が本格化した。以後，彼らに対する維持管理技術の伝承はディレクターの役割の一つとなり、延べ12年に及んだ。これによって難しいといわれる現地スタッフによる日本庭園の維持管理技術が定着した。

小形会と小形研三

小形研三（1912～1988）は、明治45年2月、佐賀県唐津市に生まれ、千葉高等園芸学校（現・千葉大学園芸学部）に進学し、ここで森歓之助先生に師事した。

古風な形式美の庭から近代の自然風景主義という新しい庭園概念への移行を強く感じさせる小形の作風は、現代の庭園スタイル「雑木の庭：Zouki Garden」を誕生させる先駆けとなった。

小形の代表作の一つは、ハワイ大学東西センター日本庭園（1963年）で、日本人で初めて米国造園家協会（ASLA）より汎太平洋造園賞を受賞（1969年）し、同年日本造園学会賞（設計部門）を受賞している。1980年に建設大臣表彰、1987年には勲四等瑞宝章を叙勲した。翌年、1988年、オーストラリア・ブリスベン市で政府出展の国際レジャー博日本庭園の作庭中に逝去された。

昭和の時代に「雑木の庭」を庶民の庭として定着させ全国的に普及させた高名な造園家であり、国内外で多くの作品を残した。自然の様相を深く洞察した落葉樹主体の庭園は、上品でしかも都会的なセンスのある洒脱な庭として一世を風靡した。しかし、残したものは庭だけではなかった。

「小形さん」、親しみを込めてそう呼ぶ弟子が300人近くいた。多くは地方出身者で寮生活をしながら庭づくりを一から貪欲に学んで出身地に帰って行った。

小形会は、これらの弟子を中心に結成され、小形の目指した新しい造園観を希求し、造園の今日的な様々な課題について議論し、自らの造園力を磨き、かつ社会活動を通じて国内外の日本庭園の維持・継承・発展に寄与することを目的としている。

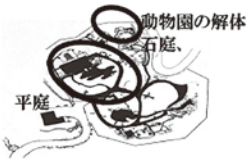
写真-1：小形研三

小形会の趣旨と目的

小形会は、庭園史に残る偉大な造園家・小形研三の作家性をきちんと整理して、その業績を風化

表-2：ディレクターの役割と庭園築造に置ける現在までの変容過程

平 欣也*
〈初代：1964～69〉
庭園黎明期において戸野デザインを忠実に施工。戸野の直接的現場指示や書面などの間接的指示のもと現地スタッフらと庭園の基盤を築く。



栗栖 宝一*
〈2代:1968-73〉
戸野デザインを踏襲しながらも、自らの実務経験や庭園技術を発揮して庭園築造を行う。

榊原 八朗*
〈3代：1972～74〉
グランドデザインは戸野によるが、関わった各所の設計と意匠は自らが行い、自然の写実的な作風を紹介するなど古典とは違う現代和風を導入した。

和久井 道夫*
〈4代：1974～76〉
協会側の意向や要求を踏まえて自ら設計施工で庭園築造を行う。実務面で戸野の影響力が薄らいだため、この頃から自らの判断で庭園を築く。

水野 雅之*
〈5代：1977～80〉
財源困窮の中、築造は補修程度に留めて剪定などの維持管理を重点的に行う。現地スタッフに維持管理技術の伝承を目指し本格的なトレーニングを行う。

佐野 吉郎*
〈6代：1982～84〉
庭園の改修を担当。会員や庭園愛好者に日本庭園を説明する機会が増える。園内外のイベントに積極的に参加し、加えてスタッフらに維持管理技術を実地する。

土沼 隆雄*
〈7代：1985～87〉
敷地拡張に伴い、自らが設計、施工し庭園築造技術の伝承や維持管理の伝承継続を行う。園外の庭園築造（催し）と各種講習会も積極的に行う。

田中 徹*
〈8代：1988～91〉
庭園改修及び新たに必要な工事を指摘し、自らの設計施工で行うなど庭園の集大成をはかる。引き続き維持管理、施工の技術面の伝承に力を入れる。

注：水野雅之（1977-1980）庭園築造は補習程度にとどめて維持管理を行う。
現地スタッフに維持管理技術を教える。

させることなく記録し、「小形研三研究」ともいうべき視点を土台にしながら、今後、さまざまな庭園に関する事業、そしてボランティア活動や広く造園の普及・啓蒙及び技術支援などを含めて、国内外において積極的にこれを進めていきたいと考えている。

生前、小形は海外における作庭活動で、ワシントン日本大使館茶庭、ハワイ大学東西センター日本庭園、日秘修交百周年記念日本庭園（ペルー）、国際レジャー博日本庭園（オーストラリア）をはじめ、世界各地に日本庭園を築造。人材育成では前述のポートランド日本庭園へディレクター8人中5人*を送り海外経験を積ませた。またカナダでは現地技術者との交流を大切にされ、今でも小形を慕う造園家は多い。このように日本庭園を通じた海外支援と交流に大きく貢献されたことを踏まえ、これら小形の意思を引き継ぐことは小形に続く造園家として与えられた社会的使命でもあり、小形会では特に海外技術支援は重要なプログラムと考えている。

小形会の海外技術支援活動

小形研三が逝去された数年後に、小形が主宰した東京庭苑のOB有志から海外支援を視野に入れた「庭園技術集団」的な会の構想が持ち上がった。1977年、海外に居住するOBらの協力を得て、第一回海外日本庭園の視察を行うことになり、視察は計3回行われた。これら参加者の有意義な海外体験をもとに小形会が構想され、2007年6月、会員100余名を連ねて正式に小形会が発足した。

その後、小形会では、国内において庭園技術講習会、小形研三作品見学、パネル展の開催など、今日まで活発な動きを展開している。この間、海外技

表-3：小形会の会則

会の名称	小形会（おがた かい）Ogata Kai	
設立年月日	2007年6月16日	
会の目的	小形研三の遺志を継ぎ、小形が目指した造園観を新しい観点から希求し、造園の今日的課題について議論し、自らの造園力を磨き、かつ社会活動を通じて国内外の造園の発展に寄与する	
諸事業	・「小形研三の記録集」の作成とその発行（雑木の扱いや空間構成、語録の収集）等 ・国内外の造園活動に参加し、技術支援を行う、そのための情報収集とその提供等 ・国内外の造園研修、各種勉強会・講習会、シンポジウムの開催、機関誌の発行等 ・小形研三作品と会員作品の巡回パネル展、各種コンクールの開催（小形賞授与）等	
会員	正会員	会の趣旨に賛同する者で理事会の承認を受けた者
	準会員	会員が推薦する個人
	賛助会員	会の趣旨に賛同する者で理事会の承認を受けた法人又は団体
	名誉会員	会の活動で多大な功績をあげた会員で、理事の推薦により総会で承認された個人
入会方法	入会申込み書を提出して理事会の承認を受けた者又は団体、法人	
入会金 会費	入会金（入会時）	10,000円
	正会員年会費	5,000円
	賛助会員年会費	10,000円（2019.02.01現在）
基金	会員、その他、会の目的に賛同する者による寄付その他をこれに充てる	

表-4：小形会の活動（海外編）

年月	項目	概要
1997年10月	海外日本庭園視察① （アメリカ）	小形会の設立を目指し、ポートランド日本庭園、ワシントン州立大学植物園内日本庭園ブッチャートガーデン、新渡戸稲造記念庭園、ハワイ大学内日本庭園等、米国・カナダの代表的な日本庭園を中心に視察を行う
1999年2月	海外日本庭園視察② （オーストラリア）	小形研三の軌跡をめぐる庭園視察。マウントクーサ植物園内日本庭園（エキスポ会場から移設）を視察。現地の材料で巧みにつくられた池泉庭園
2003年11月	海外日本庭園視察③ （アメリカ）	会の発足を踏まえ、モリカミミュージアム日本庭園、フロリダ近郊及びロスアンゼルス近郊の公共緑地、ハンティントンライブラリー庭園等を視察
2007年6月	小形会設立	会設立の趣旨・目的①小形研三の庭園観を踏まえ、会員相互が研鑽を積み造園の今日的課題に取り組む ②小形研三の理論・技術の継承と発展 ③社会活動の一環として国内外の庭園の維持・継承に寄与する
2008年9月	日本大使館茶庭改修支援 （ワシントンDC、アメリカ）	茶室の移設に伴って一度整備されたが、設計者小形研三の作風を再整備によって再現することを目的に、現地の庭園材料を使用し完成した
2009年2月	ハコネ庭園通路改修支援 （サラトガ市、アメリカ）	歩きづらかった階段の整備、茶庭の延べ段とその周辺の植栽、四ツ目垣の制作、現地技術者との剪定、石積みなどのワークショップを実施
2009年9月	アルバカーキ植物園内 日本庭園築造支援 （ニューメキシコ州、アメリカ）	日本庭園内に新たに100㎡余の枯山水庭園を築造した。枯滝を組み、不動石から始まる枯れ流れは、小滝からやがて池泉にいたる。中間に据えた礼拝石と蹲を飛石で繋ぐ。庭園入口には四ツ目垣（結界）がある
2011年3月	ハコネ庭園参道改修支援 （サラトガ市、アメリカ）	正門前の整備では、2本のセンペルセコイヤを石積みで囲い、その手前には一対の春日灯籠を据え正面性を整えた。その他、剪定と縁石の講習
2014年2月	ハコネ庭園禅の庭改修支援 （サラトガ市、アメリカ）	取り付け園路の変更による庭園整備で、御影石の犬走り、沓脱石の再設置庭門、延べ段を新たにつくり、要所々に景石を据えて砂利を敷き枯山水とした
2018年2月	ハコネ庭園 草庵風露地改修支援 （サラトガ市、アメリカ）	主庭西方斜面の中腹にある茶室「松月庵」を中心とした300㎡余を露地として新たに築造。内、外露地構成で、土間や延べ段、飛石等で構成され、今後、現地有志による待合の建設が計画されている。

術支援活動は計6回を数え、そのうち4回がカリフォルニア州サラトガ市のハコネ庭園である。ハコネ庭園は築造から100余年余り、歴史的価値を有する本格的な日本庭園である。以下、小形会の技術支援についてハコネ庭園の関わりで詳述していく。

小形会とハコネ庭園

2005年、ハコネ庭園を運営するハコネ財団から庭園総括アドバイザーとして招聘された土沼隆雄は、庭園を支える市民を取り込んで互いに交流する社会や、庭園を守る市民ネットワークの形成など、地元市民を中心に日本庭園を核とした地域コミュニティの形成を目指し、かつ機能的、効率的なシステムとプログラムで庭園を管理運営することを目的に総合基本計画（庭園マスタープラン2006）を作成した。主な内容として①庭園専門委員会の設立、②姉妹庭園関係の締結、③海外技術者支援の要請、④国際会議の招聘などがあり、この内、庭園委員会は現在「Garden Advisory Committee」として数名の専門家で構成されている。また姉妹庭園関係については、両財団が共に進化し、市民参加型の各種文化プログラムの発展に寄与すること。そして市民レベルで米国と日本の文化相互の理解を促進し、環境・社会・組織のなかで日本庭園の新しいビジョンを描くことが確認され、2011年、（一財）北方文化博物館（新潟市）と姉妹庭園関係を締結している。

また、海外技術者支援の要請では、日本庭園の維持と再生・継承（庭園美化や維持管理、修復・再生などの技術と体制・組織・施設経営）、日本庭園と社会との関係性の検証（日本庭園がしっかりと社会でその役割・新しい価値を生み出し、社会に認められて組み込まれるかどうかは、将来、日本庭園そのものの存続に関わる重要なテーマ）、世界からみた日本庭園（日本庭園はどのように世界と関わろうとしているのか、世界各地の広範な庭園群との比較や特質など十分な考察）などの観点から、2008年小形会を推薦し、技術支援を行う関係がスタートした。

ハコネ庭園（Hakone Gardens）

ハコネ庭園は、誕生から100余年の歴史を経て現在の姿をとどめている。1915年、サンフランシスコ芸術の良き理解者であり推進役だったオリバー、イザベル・スタイン（Oliver and Isabel Stine）夫妻は、夏を涼しく過ごす別荘を建てるためにサラトガ山の中腹に約18エーカー（71,000㎡）の土地を購入し、すぐに庭園築造に着手した。大工・新谷常松（和歌山県出身1877-1921）を雇い入れ、1917年、敷地の中腹斜面に日本建築・上の茶屋「月見台」（Upper Moon Viewing House）を建設した。この建物は数奇屋造りと書院造りが和合しており、書院には床の間や引き戸、違い棚を設えるなど加工を避けた自然素材を多用し、最小の装飾で軽やかさが強調されていて、当時の建築技術で

写真-2：ハコネ庭園

写真-3：ハコネ庭園支援の会
邦人を中心としたハコネ庭園支援の会は、小形会が出向くたびに快く迎えてくれ、最終日にレセプションで労をねぎらってくれる。

つくられている。なお、現存するもう一つの日本建築・下の茶屋（Lower House）は、1922年（1980年に内部を一部改造）に建築されている。これらと同時期に庭師・相原直治（1870-1941）を雇用して日本庭園の築造を開始している。

庭園は池泉廻遊式で、主景は中央の池と南側斜面の山筋から水を落とした滝流れ。築山の形状や滝石組み、景石の配置、飛石の打ち方など随所に伝統庭園の手法が施され、ともに明治時代の巧みな庭園技術・建築技法をみることができる。

なぜ「ハコネ庭園」という名前なのかについては、当時、庭園築造に際して、創始者・イザベル・スタインらが、1915年にサンフランシスコで行われたパナマ太平洋万国博覧会での日本文化やその生活ぶりを紹介した展示に刺激を受けて、その翌年に日本の箱根地方を訪ね、いたく感激をしたことが伝えられており、ここから命名されたという。

ハコネ庭園は、1984年にハコネ財団が設立され、現在、この財団によって管理運営されており、市民を主体とした独自の運営を行い、北カリフォルニア地域で日本文化の発信基地としての役割を担っている。

1999年、日本竹の会「国際情報誌」が初めてハコネ庭園「The Story of Hakone Japanese Gardens in Saratoga」を日本向けに紹介し、2000年にはサラトガ市とハコネ財団との間で以後55年間の管理運営契約を締結、2003年にはアメリカ合衆国の重要文化財：The National Trust's Save America's Treasureに登録されている。

小形会の海外技術支援と基本的な考え方

国内外を問わず、庭園を特徴づけるものとして①土地と自然風土、②人間の意志や思想、③庭園を実現するための経済的・社会的基盤などがあり、その相互関係が一つの庭園様式を規定している。すなわち、このことは作庭地域の地理や地形、自然植性、気候風土、造園材料、施主の考えや作庭者の思想と技術、文化、歴史伝統の積み重ねまでもが少なからず庭園に影響を与えていて、それによって地域々の庭園スタイルやデザインが形つ

表-5：ハコネ庭園と日本との交流における主要な動き

1964年	安井清、サンマティオ市・山内好子「桂の院」計画のため渡米し、石原淡草と会う。
1966年	サラトガ市が箱根庭園を購入し所有者になる。
1967年	箱根庭園が市所有になったことを契機に、サラトガ市長・チャールス・ロビンが京都府向日市に安井清を訪ね、山田善一市会議員と共に箱根庭園の実情と将来計画について相談を行う。
1968年	安井清、庭園と日本建築を一層引き立てるため丘中腹に「椿山」の造成を提案する。椹木信太郎ら指導のもと箱根庭園で竹の移植を行う。庭園の手入れについてサンフランシスコ湾近在の各市職員(庭園関係)と共に講習会を開く。
1978年	京都・乙訓ロータリークラブからサラトガロータリークラブを通じて箱根庭園に灯籠一基（西野屋形）が寄贈される。
1980年	竹の会サラトガ支部(日本竹文化振興会)会長にBruce Parkinsonが就任する。 石原淡草が宮崎県の実家に帰省中に事故で急逝する。
1981年	Jack Tomlinson、椹木信太郎に師事し、庭園技術習得のため４ヶ月間来日する。
1984年	安井清、箱根財団設立のため渡米し、William Glennon元サラトガ市長やDavid Moyles元同市長らと会合を持ち、箱根財団が設立される。 サラトガ市と向日市が姉妹都市関係を締結する。安井清、箱根庭園の将来計画を作成する。
1987年	姉妹都市締結を記念して河原造園、小川造園、民秋造園らの尽力で「絆園(竹の庭)」を庭園内に築庭する。 サラトガ市は篤志家・永井盛人に今までの経過を伝え、文化交流会館(京都・茶商家屋)の移築・建設支援を願う。 永井盛人、文化交流会館の建設予定地を視察し、文化交流会館建設支援の調印を行う。
1988年	文化交流会館建設に向けて日米相互交流会を開催する。
1989年	交流会館建設の詳細な打ち合わせ会を開催する。
1990年	箱根庭園にて地鎮祭を行ない、交流会館の建設が始まる。
1991年	交流会館竣工　安井清、永井盛人両氏がサンフランシスコ日本総領事館に出向き経過報告を行う。
1992年	文化交流会館の竣工式にWilliam Kohler、Mayor、Norman Mineta、Atsushi Tokinoya、Donald Miller他多数列席し、日本から安井清、永井盛人が出席する。日米文化関係者を招いて慰労会を開催、会館がオープンする。
1993年	会館をお茶の資料館として整備する。
1994年	第一回お茶の根交流会/名古屋豊茗会による日本の茶の講演する。 第二回お茶の根交流会/三重県のお茶の種2,270粒を贈呈する。 第三回お茶の根交流会/名古屋邦楽お囃子の鳴和会による演奏会を開催する。
1995年	第四回お茶の根交流会/犬山市にて市主催、サラトガ市文化交流訪日使節団歓迎会とお囃子の演奏を行う。 第五回お茶の根交流会/京都・西川流日本舞踊による会を開催する。
1996年	住民投票でサラトガ市減税案が通過し、以後、箱根財団の予算が削減される。 第六回お茶の根交流会/京都府立茶業研究所からお茶の苗木（品種:こまかげ／やぶきた100本）の贈呈と植樹を行う。 第七回お茶の根交流会/名古屋・豊茗会によるお茶会と茶の来歴の展示する。
1998年	第八回お茶の根交流会/箱根財団の主な関係者と交流会を開催する。
1999年	第九回お茶の根交流会/元首相・細川護熙による講演会を開催する。
2003年	第十回お茶の根交流会/サンフランシスコ総領事・中村茂主催の箱根財団を支援する会に出席する。 日米友好150周年記念にあたり中村茂総領事、安井清、永井盛人ら3名に感謝状がサンフランシスコ州議会から贈呈される。 永井から総領事を通じて箱根財団へ1,000米ドルが寄付される。
2004年	箱根財団の管理者がポートランド日本庭園にて「海外に本庭園が抱える諸問題」について意見交換を行う。
2005年	箱根財団公式アドバイザーに土沼隆雄が推薦され、新しい動きが始まる。The National Trust's Save America's Treasureに登録される。
2006年	庭園調査とヒヤリングを実施して箱根庭園の将来を描いた「マスタープラン」が完成する。以後、マスタープランによる計画的な庭園整備や管理運営体制の構築を推進する。箱根財団理事会にて「姉妹庭園」の意義や重要性を説明する。
2009年	箱根財団の組織内に庭園専門委員会が設立される。小形会が庭園整備ボランティアの支援を行う。箱根財団理事会にて「姉妹庭園」の方向性を議論する。箱根財団理事会、市民の会にて（財）北方文化博物館との姉妹庭園関係について説明し、締結に向けて動き出す。
2010年	サラトガ市民総勢40人が（財）北方文化博物館（伊藤邸庭園、清水園）を表敬訪問し新潟市民と、交流会を催す。
2011年	小形会が庭園整備ボランティアで第２回目の支援を行う。 （財）北方文化博物館・伊藤文吉館長以下9名が箱根庭園を訪問し、姉妹庭園締結の調印を行う。
2012年	「姉妹庭園締結を祝う市民の会」が発足し、箱根財団理事ら出席の下、新潟市内で祝賀会が開催され、多くの市民と共に締結を祝う。

1）安井清：1925（大正15年）京都府生まれ。1945年（昭和20年）立命館専門学校（現立命館大学）卒業、（株）安井杢工務店常務取締役、専務取締役、取締役副社長を歴任。主な事業として松花堂庭園内茶席他（八幡市）、織田有楽斎の国宝「如庵」の移設（犬山市）桂離宮の昭和大修理（京都市）などがある。
2）小形会：造園家小形研三の門下生を中心に2007年に結成された非営利の造園実務の研究機関。海外支援では、過去にワシントンDC日本大使館の庭園修復及び維持管理、アルバカーキー日本庭園の築造等の活動がある。

（敬称略・文責：永井盛人、土沼隆雅）

くられている。この意味において、国を超えた地域的性格は庭園様式にまで関わる重要なファクターといえる。このように庭園様式を規定する地域的性格は上記の様々な要因の複合体であることから、地域性とはその国の「地域らしさ」であって、小形会ではこの地域的性格を大切にしている。

また庭園の本質的価値については、過去、長い歴史のなかで、既にその体裁を整えてきた日本庭園（当時の庭園技術が基盤で成立）をむやみに改変してはその価値を逸してしまう。特に海外の日本庭園では、前述のように国家間の友好の懸け橋であったり、国を超えて貢献した人物の顕彰やメモリアルなど特別な成立であることが多い。すでにある庭園の修復・改修や園内における新規の庭園増築に関しても庭園の存在意義や様式の分析、維持管理方法、将来性、市民との結びつきなどを担保する議論を関係者と十分に行った上で、最小限の庭園変化にとどめるべきである。

これに付随して、小形会では特に文化財要素の庭園については、上記の修復・改修や特殊事情で行われる庭園の拡張で導入される庭園技術において、時代の技術・素材・構成上の特徴などをあらかじめ十分に検証して理解した上で、その手法にならった違和感のない庭園技術に再編し、導入している。旧齋藤家別邸庭園（新潟市）など過去の事例では、時には小形流庭園技術の癖などを意識的に消した技術の落とし込み（適応）を行っている。

庭園は本来、その数ほど庭園技術や手法、形があり、よってその豊かな表情が庭園の味わいや魅力に繋がっている。ハコネ庭園のように1900年代初期に発揮された築造技術に他のさまざまな技術や手法が入り込むと混乱が起こり、不調和を起こして結果的にトータルな美の形成に繋がらない。この点は特に注意する必要があった。

支援の進め方と承認プロセス

ハコネ庭園の場合、庭園の修復や維持管理の実践及び考え方・手法などについては、歴史的文化的価値を損なわないなどの詳細を記述したハコネ庭園マスタープラン（2006）に準じて行う方針をとっている。

具体的には場所、設計、材料、日数、費用、導入される庭園技術や工法について、小形会は、支援要請に応じて支援計画書を提出し、事前に庭園委員会が内容を検討、協議し理解したのち最終的に承認を行う。これを受けて支援活動を行っている。

次に関わった庭園修復・改修及び維持管理については、どこを、どのような考えで、だれが、いつ行ったかについて歴史的検証が可能な配慮をしつつ、その詳細を記録して残し、実務面では庭園修復・改修及び維持管理について、常に現地技術者らと協働しながら行うことを原則としている。

庭園技術者を対象とした技術向上プログラムでは、日米庭園技術者同士が自由な意見交換を行うことから始まり、相互の地域性の違いからくる形、技術、考え、庭園利用形態などや、これとは別に現代における日本庭園の持つ本質的な価値についても①社会性、②利用形態、③国民性の観点などから、国を超えて共通するものは何かなどの理解も深めている。維持管理ではワークショップを積極的に行い、これによって守る・つなげる庭園技術を向上させている。

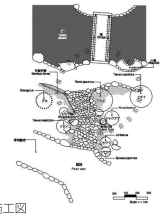
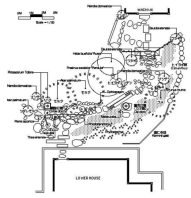
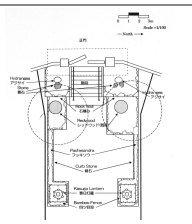
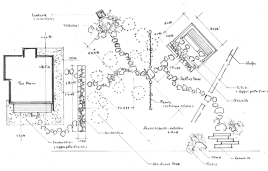
海外技術支援の実践

海外にはこれまで多くの日本庭園がつくられてきた。その目的の一つは日本における古くからある伝統形式の日本庭園を移植し、その美しさと日本が持っている文化性、伝統性を、庭園を通して紹介することであった。自明なことだが、これらの文化や伝統は人々を介して長い時間をかけてモノやコトに置き換えられて継承されてきた。伝統的日本庭園の場合、これらの庭園造形や美しさの創造、庭園維持にはそれなりの技を保持した技術者の存在が求められ、この点から小形会はこれらの要請に応えてきた。（表-6参照）

海外技術支援の方向と課題

近現代における日本庭園を国内外で俯瞰すれば、扱う材料や感性、構成、発想などが実に豊かな庭園が多く、伝統色の強い古典的な形式主義の庭園はほとんどつくられていない。しかし、未だに延べ段、蹲踞（つくばい）、竹垣ばかりを教え、か

表-6：海外技術支援の概要

第1回技術支援（2009）	**〈支援内容〉階段の改修（付け替え）とその周辺の修景** **〈施工場所〉正面から上池に上がる直線階段** **〈改修理由とその概要〉** 蹴上に丸太が使用され、歩きにくく意匠性にも乏しい。正門から庭園に入ると最初に見える景色であるが、直線的でその前方のアーチ橋と階段が視覚的に直線で重なり、景観を単純化している。空間構成上、奥行き感を阻害しているため、線形を変え、石段に付け替えた。	 施工図 〈階段の改修（付け替え）と周辺の修景〉 〈施行中〉 〈完成〉
	〈支援内容〉つくばいと通路の改修及びその周辺の修景 **〈施工場所〉茶庭内** **〈改修理由とその概要〉** 茶事に使いにくい露地。本来、つくばいの景色は鉢、手燭石、湯桶石、前石、灯篭、植栽との組み合わせで美の空間を形成して完結している。ここでは鉢前の空間構成上の景の納まりという点でそのバランスが崩れていた。飛石も不連続で歩きづらく、高低差の納まりも不完全だったため、これを修復。	 施工図 〈つくばいと通路の改修及びその周辺の修景〉 〈完成〉 〈完成〉
	〈支援内容〉四つ目垣の修復 **〈施工場所〉Lower Houseと茶庭を取り囲む垣根** **〈改修理由とその概要〉** **四ツ目垣講習：**以前から四つ目垣で結界がつくられていたものだが、老朽化してすでに立て子がなく、不完全であるため、立て子を補完して、これを完成した。 **剪定講習：**どの枝をどのように落とすのか、落とすとその近辺の枝がどのように伸びていくのか、ここでのボリュームはこのくらいのバランスがよく、他方ではもっと大きく成長させて、枝はこちらの方にこのくらい伸ばしたらいいなど具体的なアドバイスも行なった。	 〈四ツ目垣講習〉 〈剪定講習〉
第2回技術支援（2011）	**〈支援内容〉灯籠の移設と石積み、四ツ目垣及び植栽による周辺の修景** **〈施工場所〉正門前東側（庭園外）** **〈改修理由とその概要〉** ハコネ庭園からの要望があり、写真で精査したところ、二基対の春日灯籠と門とのバランスと映りが悪く、修景を目的とした庭園改造の必要性があった。修景は伝統工法の野面石積みを正面に配し、景の引き締めた。春日灯籠は門前から参道中央部に移設し、その周りを四ツ目垣で囲い、景色をつくると同時に来園者の安全面にも配慮する構成とした。	 施工図〈正門周辺の修景〉 〈完成〉 〈完成：全景〉
	〈支援内容〉剪定と四ツ目垣のデモンストレーション **〈施工場所〉庭園内、正門前（庭園外）** **〈改修理由とその概要〉** 四ツ目垣の実演講習とモミジ類など落葉樹主体の剪定技術講習。多くの地元ガーデナーとワークショップ。樹木剪定と庭園全体の空間構成の調和が目的。樹木の形態と空間バランスの二面性から説明を行なった。実技では、個別にいくつかの班を編成し実際に作業を行ってもらい、それについてQ&Aで対話的な演習とした。	 〈ワークショップ 1〉 〈ワークショップ 2〉 〈デモンストレーション〉
第3回技術支援（2014）	**〈支援内容〉枯山水庭園の改修** **〈施工場所〉Lower House 前庭** **〈改修理由とその概要〉** 障がい者のためのアクセス園路の付け替えに伴う庭園改修。庭園を分割していた主園路を建物西側に付け替え、勾配を抑えたワイドな園路に改修。御影切り石と洗い出し犬走りで渡りを再構成した。車イスのまま、庭園景を楽しむことができるようになった。施工は研修も兼ねており、近在の技術者はもとより、遠くはアッシュビル、バンクーバ（カナダ）からも参加者があり、意見交換も活発で有意義な場となった。	 〈施行中〉 〈完成〉
第4回技術支援（2018）	**〈支援内容〉茶庭／土間工（コンクリ洗い出し、延べ段、飛石、垣根）** **〈施工場所〉南斜面中腹** **〈改修理由とその概要〉** 茶室を庭園南斜面中腹に移築して、しばらくが経過していたが、茶愛好会からの要望もあり、茶室・松月庵を中心とした約300㎡の敷地を茶事に使用できる露地庭として整備することが決定。支援ではつくばいのほか、茶室の土間や延べ段、飛石など露地庭の基本構成要素を中心にした内露地・外露地で、四ツ目垣を結界としたシンプルな二重露地とした。	 〈基本計画図〉 〈完成〉 〈完成〉

つ日本庭園そのものが、あたかも古典的・古来伝統的な形だと主張し、茶や生け花のみに精神的依存をし続ける風潮があり、これらは特に海外で日本庭園を語る日本人に多い。日本庭園は、明治維新後、ごく限られた階層の知識人たちの理解と暗黙の了解によって庭園そのものが伝統化、形式化されていき、それゆえ、庭園の造形や知識力によって培われた教養が、庭園の意味や形などにおいて前面に出れば出るほど、それらを身に付けていない人達には理解しがたいものになっていった。日本庭園は社会から遠く、個人趣味の強い、狭い世界で語られてきたのではあるまいか。生前、小形さんは「造園家は、社会に対してどういう価値観と造園観を持つのか」とよく話していた。

日本庭園の本質とは、庭園の形そのものではなく、その根本は人間と庭園の関係の本質である、といわれる。よくよく考えてみれば、庭園は庭園そのもので成立するわけではなく、必ず傍らに人がいて、人と庭園の豊かな結びつきがあった。日本庭園そのものは、社会的情勢や時代の要請、各国の習慣や文化、地域性、庭園材料、技術、美意識など多因的に成り立っているため、どうしてもこれらを包括的に理解する視点が必要となる。加えて、庭園は社会で「生きた総合空間」として時代や人を多様な形で繋ぎ、次代に受け渡すことや、現代社会のなかで庭園を考えて、しかも日本庭園が人間社会のなかで果たす役割を広範囲のなかから見つけ出して定着させることがより重要視され、これらは今後、日本庭園を考える際に、世界に共通した課題の一つになると思われる。

参考文献

１）土沼隆雄、鈴木誠「ポートランド市ワシントン・パーク日本庭園の形成過程の特徴に関する考察」日本建築学会（1999）

２）土沼隆雄「ハコネ庭園総合基本計画／Hakone Garden Master Plan」（2006）

３）土沼隆雄「文化財庭園としてのハコネ庭園の整備と基本的な考え方」（2009）

４）小形会「サラトガのハコネ庭園技術支援報告書第1～４」（2009～2018）

５）土沼隆雄『越後／新潟の庭園』東京農大出版会（2014）

６）『庭225創刊40周年記念・特大号・庭の未来へ』株式会社建築資料研究社（2016）

７）鈴木貞美『日本人の自然観』株式会社作品社（2018）

土沼 隆雄（どぬま たかお）

1953年新潟市生まれ
株式会社要松園コーポレーション代表取締役
小形会理事
新潟大学大学院修了、博士（工学）

表彰　在ポートランド日本国総領事表彰（2010）
　　米国ポートランド市表彰（2010）

賞　日本造園学会賞奨励賞（2011）
　　東京農業大学造園大賞（2015）
　　日本造園学会賞（2015）

著書　『建築知識「住宅植栽マニュアル」』共著（1998）
　　『越後/新潟の庭園』東京農大出版会（2014）
　　『新潟の庭/スケッチ＋実例集』株式会社博進堂（2018）